

# 平成28年度学校評価総括表

H29.3.31 奈良県立登美ヶ丘高等学校

教育目標	自我敬愛に基づく協調の精神に富んだ心豊かな人間性を育成するとともに、自ら定めた目標に向かって意欲的に取り組む態度を育てる。		総合評価
運営方針	日々の学習活動を大切に生徒の進路実現を目指すとともに、学校行事や部活動を通して「知・徳・体」のバランスのとれた生徒を育成する。		
平成27年度の成果と課題	本年度重点目標	具体的目標	
日々の教育活動の成果として、規範意識が向上した。自転車通学マナーとともに、情報倫理に関する指導が課題である。部活動や勉学にまじめに取り組んでいるが、主体性と積極性に欠ける面も見られる。キャリア教育の推進によって、自らの目標を明確にし、主体的に取り組む姿勢を育成したい。教員間の連携を高めるために組織の改編をし、一定の効果は見られた。今後も、組織力強化に向けて取り組みたい。生徒の学力向上のために、教員の授業力のさらなる向上を目指す。	キャリア教育の推進	・学校教育のあらゆる活動を通して、将来のビジョンを描くことができるように進路指導を充実させる。 ・規範意識を高め、信頼される人間の育成を図り、コミュニケーション能力を向上させる取組を推進する。	
	学習意欲と学力の向上 自立した学習習慣の確立	・できるだけ早く進路目標を設定させ、目標達成のためにHRや個人面談を充実させる。 ・基礎基本を大切にし、論理的思考力・表現力・判断力を育成するために授業改善や工夫を図る。	
	グローバル人材育成(国際理解)の推進	・グローバルなコミュニケーション能力を高めるために、英語教育を重視する。 ・郷土の歴史や風土を知り、郷土を愛する精神を育成する。	
	地域との連携	・本校教育活動に対する地域住民の理解を得るための取組を推し進める。 ・開かれた学校としてあらゆる機会を利用して情報を発信する。	
	学校の組織力の強化と教育力の向上	・目標達成状況や課題の共有化・焦点化を図り、解決に向けた方策を探る。 ・学校評価を活用し、外部評価を念頭に適切な改善を図る。	

3

## 年度末

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価 4段階で評価、 数字を入れる	成果と課題	改善方法	学校関係者評価
第1学年	基本的学習習慣の確立をはかり、健康的で規則正しい生活を行い、学校生活を充実させる。	日常の挨拶の励行、不注意による遅刻が最小限になるよう努める	3	時間が過ぎ、学校に慣れてくると不注意による遅刻が目立つようになった。2学期後半からは特定の生徒についての遅刻が多く見られる。部活動への参加はよくしているが、自己管理能力については今後の大きな課題である。	1. 改善案：遅刻については、回数毎の指導を明らかにする。 2. 改善案：家庭学習については教科と連携をとり、毎日の課題で少しでも家庭での学習時間を確保できるようにする。課題の出し方にも工夫をして、最終的には必ず本人の成績に反映させる。 3. 改善案：家庭学習の時間数や課題の達成度合いを数字で示す。 4. 改善案：総合の授業のグループワークを通して自己の役割を果たし、自己表現させる力を身につけさせる。	<全般> 30周年を終えて、40周年に向かって、登美ヶ丘高等学校のよいところをもっともっと伸ばしてもらいたい。  学力だけでは生きていけない、よい経験を積んで「生き抜く力」をつけてもらいたい。  入学式など、式典での子どもたちの活躍は他校にはない、いい取組である。生徒が前に出て活躍するのは素晴らしいことであり、活躍の舞台を多くするというのは重要である。  <学年> 遅刻に関する指導に関して、遅刻の理由も大事だが、遅刻をさせない指導も大事である。その点に取り組んでいただきたい。
		部活動への積極的な参加を促す。部活動では目標と期限を設定させた取り組みをさせる中で、自己管理能力を身につけさせる。	3			
	部活動や個人の取り組みを大切に、その中の課題を成し遂げられるように励ます。	4				
	目標を立て、向上心を持って学習に取り組ませる。授業を大切に、家庭学習を充実させ自主的に学習する習慣を身につけさせる。	3				
	予習・復習を定着させる。何よりも日々の授業を大切にさせる。	3				
	面談やHRなどで自己の将来像を思い描かせ、その実現に向かう姿勢を育てる。自己実現に取り組ませる中で、相談にのり、補習を行うなど、適切な支援を行う。	4				
第2学年	学校生活に積極的に取り組ませ、行事などを通して、生徒の連帯感を高め、協調性を培う。他者への思いやりや心を持って、互いの違いや個性を認め合い助け合う社会性を身につけさせる。	生徒間や教員との交流の機会を出来るだけ多く体験させ、各種委員などの役割を活用し、他者とのコミュニケーションが円滑にとれるように導く。	4	行事や総合的な学習の時間への取り組みは熱心で協力して何かを成し遂げようという目標に対しては概ねできつつある。仲間との共同作業は学校に慣れてきたということもあり、時間の経過とともにスムーズに進めることができている。しかし、自己の役割をはたすという最低限のことの先を読み、周りを率いていく姿勢を示す生徒が少ない。	1. 改善案：遅刻生徒に対しては遅刻理由ごとに回数数をカウントして、回数に応じた指導を家庭と連携して行う。 2. 改善案：保健室来室生徒を担任と学年で、見守り、来室回数が多い生徒については面談を行う。 3. 改善案：CTのねらいである「表現力向上」と進路に対する取り組みは、同一のものである。読むこと、まとめること、書くこと、思いを述べること、の各領域について取り組む。 4. 改善案：進路対策として、受験科目の週末課題を生徒に課す。評価に加え、解説も加える。適切な分量を学年で考える。 5. 改善案：クラブ引退後、受験勉強にすみやかに入れるように、学年としての声かけ内容を教員で共有する。	<進路> 進路指導に関しては、生徒本人が希望するところへ進めるかが重要である。授業の中で力を付けていくほかはない。 進路指導に関して、たしかに将来の仕事を考えて進路(大学)を決めるとするのは大事である。実績表があるが、本当に自分が納得いく進路選択ができてきているのか、そういう満足度が知りたい。満足度と数字で出てくる周囲の評価は必ずしも一致しないかもしれない。(そういうことが多い。)世間の評価ではなく、生徒自身が自信を持って選択をしてもらいたい。  <生徒指導> 生徒指導では、奈良県は規範意識が低いといって問題になっている。学習意欲と規範意識が低くて、学力が高いということもあり得ない。最近の中学生の学力は落ちてきているとされている。だから、そういうところにさらに気を付けていくことが大事である。 登美ヶ丘高等学校では、きちんと挨拶ができています。30周年の式典も素晴らしいかった。  <教務> アクティブ・ラーニングに取り組んでいるが、やはり、教員が話をして、これを聞き取って生徒が理解するということから、生徒が活発に動くことがポイントである。時間には限りがあるため、エキスだけを形にして、基礎学力を徹底して教え込むことが重要である。アクティブ・ラーニングに関しては、先生方がどれだけ一致して取り組めるかがポイントである。
		行事や総合的な学習の時間を通し、自己の役割を果たし、協力して活動する姿勢を育てる。	4			
	HRや総合的な学習の時間を通じて、相手に共感する姿勢や他を認め合う態度を養う。仲間との共同作業を通し人としての社会性を育む。	4				
	健康的で規律正しい学校生活ができるようにする。自ら考え、年齢にふさわしい判断、行動ができる人間へと成長させる。	4				
	規範意識を養い、問題行動には時宜を得た適切な指導を行う。様々な機会を利用して、本校の中堅学年としての自覚を持たせ、自主性を育て、自らルールを守るように取り組む。	3				
	幅広い教養を身に付けさせ、様々な選択肢の中から進むべき進路を見つけてさせる。自己の可能性を信じ、つねに向上心をもって学習に取り組ませる。	3				
第3学年	高校生活仕上げる学年として学習習慣の確立を図り、健康的で規律正しい学校生活が出来るようにする。協調性を持って社会でやっていける人間力を身につける。	高校生としての教養を身につける具体的な学習方法を考えさせる。社会に対する視野を広げさせて、社会人・職業人としてあるべき自己像をイメージさせて、今何をすべきかを考えさせる。	3	生徒一人一人にきめ細かく接することが生徒の心の安定、人間形成につながる。後半に入り、欠席・遅刻の生徒が増えたことから、粘り強く、地道な指導が今以上に求められる。また、生徒一人一人に声かけの重要性も多々感じられた。	・入学当初から3年間という長い期間を通して生徒を育てるという姿勢・取り組みが必要であり、それぞれの生徒にあった指導・支援を行い、継続的に進めていかななくてはならない。  ・教師の思いは必ず通じるものであり、生徒たちと向き合って会話していくことで信頼関係が確かなものになると信じ、我々自身も成長すべきである。また、年間を通して、クラスのホームルームが少ないが、その中でも、生徒たちに世の中の仕組みや、生き方を教えていくべきである。そのためにも、教師自身も「言葉」といわれるように語るべき言葉を持ってよう研修するべきである。	<地域との連携：生徒会指導部> 登美ヶ丘高等学校と中学校の連携のなかで、様々な機会に活きた活動とした子どもの姿を見る。子どもの姿を見ればその学校が分かると思うが、本当に生徒を大事にされていることが分かる。地域への貢献、清掃活動募金活動挨拶活動、奈良市のこども安全の日の集いがあったが、登美ヶ丘高等学校と登美ヶ丘北中学校、小学校との連携の取組を発表した。奈良市では小中一貫教育がすすんでいるが、中学生にとっては高校生の姿があこがれの姿にもなるため、今後は高校とも連携していきたい。
		面談などを通じ、生徒の学習状態をつかみ家庭学習の方法を工夫することで、学習の充実を努める。	4			
	学校行事や総合学習に積極的に取り組ませ、責任を果たす大切さ、協力する素晴らしさを体得させ、達成感を持たせる。また修学旅行において、協調性を育み、見聞を広げる。	3				
	積極的に関心を持って学校生活に取り組ませ、行事などを通して生徒の連帯感・協調性を高める。互いの個性や違いを認め合いながら連携してゆるゆる仲間作りをすすめる。	4				
	HRや日常の学校生活で、互いの個性を認めながら、連帯感を築けるクラス作り、仲間作りを努める。あらゆる機会を活用して、生徒に達成感を持たせ、自尊感情を持たせるように学年として取り組む。	4				
	進路についてしっかり考えさせ、自らの目標に向かって、向上心を持って学習に取り組むよう指導する。授業に集中して取り組ませ、家庭学習を充実させる。学習方法を工夫し、自主的に学習する習慣をつけさせる。	3				
第3学年	積極的に学校生活に取り組ませ、行事を通して生徒の連帯感・協調性を高める。互いの個性や違いを認め合いながら協力できる仲間作りをして、他者と共存できる社会性を身につけさせる。	HRや日々の学校生活において、自己を見つめさせ、向上心を持って具体的な進路目標を設定し、それに向けて努力出来るように助言・援助・指導を行う。進路実現のための、基礎学力と応用力を身につけ、授業に集中して取り組めるように指導する。	4	授業は静かに受けてはいるが、少し積極性に欠ける。また、受験前になってようやく勉強を始める生徒もおり、生徒たちが進路に取り組めるのが遅くならないように、家庭学習の習慣も早い時期からさせ、教師側もやる気にさせる手法を磨いていかななくてはならない。	生徒たちは最終学年として、また、最高学年としての自覚を持って学校行事に取り組むことができた。また、部活動を通しての教養も身につけ、引退後も学校生活を乱すこともなく、自分の進路に向けて取り組むことができた。お互いに相手のことも考え、支え合う姿も見られ成長を感じることができ、確かな人間力もついたと思われる。教師側ともコミュニケーションをとることによって、クラス全体、学年全体がひとつになることができたように思われる。	
		学校行事に積極的に取り組ませ、責任を果たす大切さ、協力する素晴らしさを体得させる。お互いに支えあうことが人としての基本であることを確認させる。	4			
	部活動に引退まで積極的に取り組ませ、人間的成長を果たし、学校生活を充実させてゆく。学習が単に受験を目的としたものだけにとどまらず、幅広い教養と生きる力となるように、指導する。	3				
	HRや日常の学校生活で、互いの違いや個性を認め合いながら、コミュニケーションを深め、進路実現に向けて団体戦として取り組めるようなクラス作り、仲間作りを努める。	3				

教務部	本校生の実態を踏まえ、魅力ある教育課程を編成する。	平成29年度の教育課程編成に取り組むため、特に進路指導部との連携を図りながら、各教科の要望を5月中にまとめる。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年度と大きな変更がなかった平成29年度教育課程は、5月中にまとめることが概ね出来た。ただ、週3コマ実施に伴う月曜日7限のより有効な実施方法の検討や、火曜から金曜までのCT学習内容と教科学習とのバランス調整が、今後必要になると思われる。</li> <li>進路指導部との共催によるアクティブ・ラーニング研修会を3回実施し、授業での活用参考例として有効な研修が行えた。</li> </ul>	<p>改善方法①：教員間で本校生徒へ付けたい力の共通認識と理解を一層進める。そのための資料や研修会を計画する。</p> <p>改善方法②：現行の本校教育課程と、間もなく公表される「新学習指導要領」の骨子や「各教科・科目」の目標などを照らし合わせ、平成30年度以降の教育課程について研究を進め、本校生徒にとってよりよい教育課程を作成する。</p> <p>改善方法③：アクティブ・ラーニングや観点別評価を考へるとき、他の教科や教員の授業は大いに参考になると考える。6月及び11月に実施された「授業参観月間」実施率の大いなる改善を目指す。</p> <p>改善方法④：知識理解に偏っていた評価を、4（5）観点別にバランスのとれた評価が行えるよう、「授業と評価の一体化」をより一層目指した取組を進めていくため、今年度と同様の「（観点別評価に係る）内規検討委員会」を来年度も継続して開く。</p> <p>改善方法⑤：「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に改訂されることから明らかに、探究的な学習の重要度は高まると思われる。今年度の反省を生かし、定期的な「打合せ会」のみならず、研修会の実施を4月当初に開催する。</p>
		選択科目の設定及び見直し作業と少人数授業の調整作業を行う。	3			
		アクティブ・ラーニングの授業がより一層全ての教科や科目で実施されるよう、研修会を計画する。	4			
	授業時間確保の取組を一層進める。	時間割変更や各行事の円滑な運営により、授業時数の確保に努める。	3			
		チャイムと同時に授業が開始できるよう、教員・生徒の共通理解を図る。	3			
		定期考査前の希望授業コマを確保するため、早期に調整表を提示するとともに、希望コマが100%叶うように努める。	3			
特別教室や講義室の活用を工夫し、時間割変更時のダブル・ブッキングが起らないようにする。		2				
総合的な学習の時間「僕」の円滑な運営に必要な企画を行う。	年間定期考査時間割を早期に提示することで、より計画的な作間・採点ができるようにする。	4				
	総合的な学習の時間で培うべき力の教員間における共通理解を得るようにする。	2				
	定期的な打合せを開き、PDCAサイクルが上手く機能するように努め、学年取組の共通理解が進むようにする。	3				
	教育課程研究指定校としての研究結果を生かし、「総合的な学習の時間」において探究的な学習活動が一層行われるようにする。	2				
生徒指導部	基本的生活習慣の確立とマナーの向上をめざす。	「遅刻を減らす」ことを年間の指導目標として、遅刻・入室カードの有効活用により、生徒および保護者との共通理解をはかり遅刻の減少を目指し取り組む。毎月2%未満を目標とする。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>年度当初より、「規範意識の改善」を目指し、生徒に訴えてきたが、交通マナーや登下校マナー、公共物破壊等、改善されてきているとは言えない現状である。</li> <li>「遅刻を減らす」ことに関しては、1、2学期で欠席率1.88、遅刻率1.27であった。一部の不登校傾向生徒を除くと、減少傾向と言える。</li> <li>全校集会は表彰伝達と生徒会活動が中心となり、生徒指導部としての活動が薄くなってしまった。</li> <li>立哨指導については、各学年の協力のもと計画、実行していただいたが、忘れて行けなかったという先生方があり、計画通りには実行できていない。</li> <li>県生徒指導連絡協議会主催のターミナル指導においては、計画日に学校行事が重なり、十分な指導活動はできなかった。</li> <li>生活委員会によるあいさつ運動を1学期に行った。同時に熊本地方の震災に対する募金活動を行うことができた。</li> <li>1学期に交通安全講習会として、スタントマンによる実演を行うことができ、交通事故への注意喚起を行うことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「規範意識の改善」に向けたHRでの展開および授業中の言葉がけも含めた取組を常時お願いしていく。</li> <li>教員と生徒との距離感を無くす取り組みにより、生徒理解を深め、「不登校傾向の解消」や「規範意識の改善」に繋げていく。</li> <li>立哨指導の計画・実施の徹底を進める。</li> <li>年3回の生徒理解に繋がる取り組み（アンケート等）の実施およびその結果・内容の取りまとめを行う。また、その内容および実施方法、事後処理方法について詳細に示すことができるようにする。一部質問内容等を変更し、回答及び事後処理をしやすく工夫する。</li> <li>生徒会指導部との連携および学校行事への生徒指導部としての関わりを積極的に行っていきたい。</li> <li>LHR計画にあたり、学年あるいは学級裁量の時間を増やす。</li> </ul>
		月一回の全校集会と毎日ショートホームルームでの指導を行う。	2			
		週3回の正門と周辺交差点の通学路指導を行う。各学期に1回の自転車通学生集会の開催と安全意識の定着を図る。	2			
		月3回のターミナルおよびバス乗車指導を行う。	2			
		生活委員会によるクラス・校舎内掲示用の標語とポスターを製作し、登下校マナー等の向上及び啓発活動を行う。	3			
	『毎日全員が、瞳を輝かせ、胸を張って、笑顔で登下校』を目標に、あらゆる機会を通じ、一人ひとりの生徒理解に努める。	教育相談、特別支援を必要とする生徒の支援と、関係分掌との連携を密にし、明るく健全な生徒の育成に努める。	4			
		アンケート「教えてください」を活用しての面接週間の充実、および「いじめ等」のアンケートを基に個々の生徒理解に努める。	4			
		職員と生徒が自然に挨拶をかわす、明るく素直な校風の確立。	3			
		人権教育部との連携を図り、合同ホームルームの充実を図る。	3			
	部活動の活性化と学校行事を通じて積極的に取り組むリーダーの育成を図る。	創立30周年事業を始めとする学校行事において、生徒会指導部（生徒会役員）およびオリターとの連携を密にし、その充実を図る。	4			
文化祭実行委員会の活動を補佐し、その充実と活性化を図る。		3				
生徒会指導部	生徒会役員の活動を促進し、全校生徒のリーダーとなり得るよう、各自の意欲と資質を高める。	生徒会定例役員会の時間を利用し、生徒会顧問が他校の具体的な実践例を紹介するなどの研修を実施する。具体的には、新入生歓迎行事や文化祭運営全般、全体行事などの内容について考察させ、リーダーとしての実践させる。昨年度からの生徒会キーワードとして、学校行事に全校生徒を巻き込んでいく。	4	3	<p>1、学校行事（式典等含む）への参画について 成果：入学式・30周年式典などの学校行事を生徒会が主催する形で総務企画部の先生方を中心にご協力の上、実施することができた。 課題：行事によっては計画立案段階から、生徒会役員が参画して行くとさらに素晴らしい取り組みになっていくと思われる。生徒会役員が外部の研修や発表を通じて、他校の取り組みを本校にも紹介していくことが必要である。</p> <p>2、生徒会各種委員会の役割について 成果：各種委員会によるポスター掲示が実施できた。 課題：生徒会各専門委員会と生徒会活動全体との結びつきを深化できるようにしなければならない。</p> <p>3、リーダーの育成について 成果：オリエンテーションコンダクターを中心に入学前オリエンテーションを今年度から全入学生対象で行うことができた。そのおかげで、入学後の30周年式典などでも1年生のオリターへの参加があった。 課題：新生徒会役員の確保・呼びかけについては、早いうちからの働きかけなどが必要であることが立証された。</p> <p>4、校内外での生徒会の役割について 成果：校内では、クラスが中心で生徒自身が主役になる体育大会・球技大会・登美高祭などの行事について、先生方とともによりよく行えるように生徒会指導部が協力することができた。校外（対外的）では、登美ヶ丘高校が、秋風のコンサート、オープンスクールなどで、地元の保育園・小学校・中学校との清掃活動・挨拶運動を行えた。また、人権教育部との連携で特別支援学校など共通の取り組みを行うことができた。</p> <p>5、分掌内の仕事分担について 成果：懸案であった分掌内の分担を4月に任務分担することができた。 課題：分掌内の任務が多岐にわたり、校外的（県教育委員会生徒指導支援室及び人権・地域教育課、奈良市教育委員会、地域の小中連携（清掃・挨拶）と校内的（学校内行事）の質的量的にも多く、すべての内容を分掌内でスムーズに行うことができない時期があった。オリター指導についても部員で連携していくことが必要である。</p>	<p>1、改善策：フレッシュマンミーティングの活動については、新入生の把握および在校生のリーダー的な行動の成長をみていただくことにより生徒理解にしていけることができるので、新学期初日の全校体制（新入生担当学年）の行事として取り組むことが必要であることがわかった。</p> <p>2、改善策：オリターを行事運営委員というように形態で、生徒会専門委員会に学年当初より置くこともできるというご意見をいただいた。</p> <p>3、改善策：①本校生徒につけさせたい力として、「社会人基礎力」より3つの能力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）をより、12の能力要素から、生徒会指導部が率先となって、より具体的にどの分掌・教科等とも連携して考えてもらう必要がある。②本校生徒が、社会人として自律する際にむけてのストレスコントロール力をつけるように教科・行事で、地域の大人たちと交流するよう力をつけるための時間をつくる必要がある。</p> <p>4、改善策：①登美高祭・毎年行っている秋風のコンサートなどで、教育効果をはかるために校内外ホールを含む施設の使用を文化図書部とも連携して考えること。②対外的には、地域とともに歩む学校として、登美高祭を毎年、運営に無理のない程度に公開して地域の方々にも参画してもらえらる部分。③本校生徒が連携して校外で地域の安全面や文化的な活動に貢献していく行事を作っていくことが生徒の力をつける取り組みである。</p> <p>5、改善策：分掌内の担任・副担任・学年係というように各先生方の仕事の量的分担の解消と質的分担を考えていくようにしながら、生徒会指導部員及び行事については部員が全先生方の見本となるように取り組む。</p>
	生徒会専門委員会の活動を活性化させ、生徒の主體的な活動を促進する。	生徒会の各専門委員会で立案された活動計画により、積極的な活動を行わせる。具体的には、ポスター掲示・スローガンなどの作成にとどまらず、各委員会と生徒会役員、部活動集会等も利用しさらなる啓蒙を図る。	2			
	各々の分野の生徒リーダーの育成を生徒会が他分掌と連携して、早期より生徒リーダーの育成を図る。	30周年を迎える年として、母校愛を促すような研修会のあり方を生徒会本部、クラス室長、部活動キャプテン（部長）・各専門委員長などがリーダー研修（オリエンテーションコンダクター）とともに良き学校にするために日頃から協力し合う。	3			
	生徒どうしの連帯感や愛校心を高め、開かれた学校の部分を生徒力で学校の活性化を図る。	生徒の主體的・積極的な活動のために、生徒どうしがお互いを支え合い、信頼しあえる関係を構築し、各分掌との連携を図り、入学式、オープンスクール、文化祭、体育大会秋風のコンサート、フレッシュマンミーティング、卒業式などの保護者や一般の方が本校を訪れた際のおもてなしの企画・運営を行う。	4			
	分掌内の分担内容を効率的に行う。	分掌内の分担内容を各部員が理解し、部員相互の協力によりスムーズな運営を図る。	3			

進路指導部	向上心を持って、粘り強く努力した生徒が希望の結果につながるようサポートできる体制を確立する。	生徒個々に対しては、校外模試を利用した動機付けを行い、スケジュールに基づく学習に取り組ませる。	3	3	模擬テストに関しては、先生方のご協力を得て、過去問対策など、用意した上で受験する体制を整えることが出来た。しかし、新たな体制となった今年は、「夢ナビライブ」・「地方国公立大学の講演会」・「2年生への第一志望校宣言」など、新たな取り組みも多く、実施に際して時間的な余裕が無かった。集会では、長期休業中および、新学期に取り組みべき事を指示出来た。しかしキャリア教育という大きな課題にはまだまだ改善の余地があると思われる。	「生徒に目標を持たせる」ことを第一の課題として取り組みたい。 直近の進学だけに焦点を当てた受験指導ではなく、いかに社会に貢献していくかという視点からキャリアデザインを描かせたい。 上級学校ではどのようなことを学ぶのか、その先、どのような社会貢献が出来るのかを考えさせる場を提供したい。		
		集会・面談等を通じた意識付けを行うとともに、キャリアマネジメントに対する理解を深めさせる。	3					
	生徒が、高い学習意欲を持ち、自主的に学習に取り組む姿勢を育てる指導体制をめざす。	実力養成講座を通じて、希望進路実現のための実力を身につけさせるとともに、目的意識を持って自主的に学習する態度を養う。	3	2			実力養成講座について、3年生は開講当初は例年以上の参加者であったが、2学期後半からは、例年通りの寂しい状況となった。最後まで魅力ある講座にしたい。2年生は先生方が粘り強く生徒を引きつけていただき感謝している。チャレンジタイムにおいては1年生の英語・国語の基礎学力養成については成果をあげていると思われるが、2年生のチャレンジに関しては改善の必要がある。本校創立の際におこなわれていたAPタイムの構想も参考に、次年度取り組みたい。	1年生では豊富な資料を提供し、よく考えた上で文理選択を、2年生ではオープンキャンパス・夢ナビライブ・校内の講演を通して第1志望校を決定させたい。 3年生では「総合的な学習の時間」と連携し、はっきりとした志望動機を元に、理にかなった受験先を決定させたい。
		1・2・3年生ともに、チャレンジタイムを利用し思考力・判断力・表現力を高め、同時に最後まで努力する力を養う。	2					
	10年後・20年後を見据えたキャリア教育を推進し、将来像を抱かせる。	他分掌と連携し、チャレンジタイムをはじめ様々な機会を通じて、社会に必要な要素を自覚した主体的な学校生活を送らせる。	2	3			総務部との保護者対象大学見学会・教務部とのアクティブラーニング講習会は実現できたが、その他の分掌とは連携が出来ず、反省すべき課題である。講演会について、大学フォーラムでは入試課職員がその大学をアピールするが、「大学の学び」を紹介する機会がない。来年度はその機会を作りたい。	大学フォーラム・校内説明会・地方国公立大学説明会については、日程を早く伝えその有意義な点を広く生徒・保護者に知らせ、進路選択において有効に活用させたい。
		各講演会・教科・HR・部活動を通じて将来を見据えた指導を行う。	3					
	保護者に対し、必要な情報を伝えるとともに、意思疎通を図る取り組みを行う。	保護者対象の進路説明会を行い、進学・就職に対する理解を深めてもらう。	4	4			育友会進路部とは緊密な関係を取ることが出来た。育友会大学見学会、地方国公立大学説明会・保護者対象の進路講演会には計画段階より参加していただいた。	大学フォーラム・校内説明会・地方国公立大学説明会については、日程を早く伝えその有意義な点を広く生徒・保護者に知らせ、進路選択において有効に活用させたい。
		配布物を通じて、保護者に情報を提供する。	4					
	教員に対して、外部で得た様々な情報・データを示し、教員全体で指導についての共通理解を図る。	各種の情報提供を行い、研修会を実施するなど、本校の実態と大学受験の現実に対する共通理解を深める。	3	3			アクティブラーニング講習会は出来たが、高大連携やICTに関する情報提供をすべきだったと反省している。模擬テストを正確に申し込む姿勢や、講演会を聴く態度など、向上心を向上させる指導にはまだ取り組むべき余地がある。	保護者との連絡については、今年同様、育友会進路部との連携を密に取りながら進めていきたい。大学見学、保護者対象説明会を実施していきたい。 高大接続・アクティブラーニング・ICTに関しては日々情報収集に努め、先生方に情報提供をしていきたい。
		生徒に対して、あらゆる教育活動を通じて、生徒が向上心を持って取り組めるよう指導する。	2					
人権教育部	さまざまな人権問題を自らの課題と考へて、周囲のなかまと力を合わせて解決していく生徒を育てる。	3年間を見通した人権ホームルーム活動の年間計画に沿った取組を推進するとともに、指導案の作成や資料等の収集に努める。	3	3	各学年とも年間計画にそって人権ホームルームを実施することができた。ただ、生徒が人権を自己の課題として認識し、行動できる力を付けさせることができていない。	改善案：新しい教材・資料の開拓に努め、生徒が積極的に「行動」しながら展開できるような教材を導入する。		
		他の分掌と連携しながら、多角的に人権問題にアプローチできるような工夫を行う。	3					
	他者との個性のちがいをよく理解し、共に社会生活をおくることのできる生徒を育てる。	ろう学校との交流会やボランティア活動などの体験を通して、社会における共生の在り方について考える機会を設定する。	4	4	ろう学校との交流会は本年度も2回実施することができた。参加生徒は生徒会、家庭クラブ、その他有志という限られた範囲ではあるが、生徒にとっては有意義な出会いの場となっている。本校事務の方から、事前に生徒に手話の指導をしていただいた。参加生徒は手話の他に筆談やジェスチャー等さまざまなコミュニケーションにより、積極的に交流することができた。			
		一人ひとりの生徒が人権意識を高められるような取組を進める。	3					
健康教育部	心身の健全な発達とその維持は、すべての生活の基礎であることを十分に認識させ、生徒ひとりひとりが集団の中で、健康と安全に関する諸問題を自主的・科学的に解決する能力や態度を養う。	各種検診や身体計測の結果を踏まえ、自主的に自らの健康について保持・増進させることができる態度を身につけさせる。	3	3	身体測定や各種検診の意義や重要性を理解させ、また結果についても認識した上で自分自身の心身の状態を正確に把握し常に良好な状態を保てるよう意識し行動することを心がけさせる。さらに結果に基づいた事後の取り組みは自分自身が生涯にわたり健康な生活をおくれることについても理解させた。 また生徒の保健委員会などを通して集団生活の中においても健康管理や健康の保持・増進に努めて学校生活を送る必要があることを理解させた。	1. 健康的な生活を送れるような態度を養う ・各種検診の事後治療勧告を履行させるよう指導に力を入れる。 ・自ら感染症予防などを実践できる知識や態度を養う。 ・保健委員会を活性化させ啓発活動を積極的に任せ、集団の健康にも配慮させる。 ・心身の健康という観点から「心の健康」にも配慮と共通した理解ができるよう取り組む。 ・生徒主体の救急法講習会を行いたい。		
		結果に基づき医療勧告などの事後の指導に対しても自ら実施し、生涯にわたり健康に生活していける意識を涵養する。	3					
		校内においても掲示物などを活用し健康の保持増進のための啓発活動を実施する。	3					
	運動による健康の保持増進の重要性を理解させる。食育の推進を図る。	各種の体育行事などを通して積極的に参加させ、運動と健康との関わりや必要性をより一層意識し生活できるような態度を育成する。	4	4	本校運動部員や生徒会が各種体育行事を企画運営するなど関わる割合が多く、それらを通して運動することと健康は関連性が深いこと、それが一体感や愛校心を育み、活気ある学校生活を運ぶという集団の健康にも通じていくことを理解させた。 朝食を欠く生徒は全体の約4%であるので食習慣の形成は各家庭で基本的な部分は確立されていると考える。「食育」そのものの教育については教科指導と関連付けて進めている。ただ運動部員については各単位で取組まれているようである。	2. 体育行事について ・運動部員や生徒会体育委員会をより動かし、計画・立案、運営などを行わせ愛校心や一体感を育成する。 ・「食育」については教科や部活動顧問との連携を図りながら進めていく。 3. 環境美化について ・美化委員会活動や掲示物により環境美化に対する啓発を行い、清掃活動により一層意欲的に取り組む態度を育てていきたい。 ・通学路の清掃奉仕活動は生徒会を中心にクラブ員が協力して十分な成果を上げるよう協力する。 ・美化委員会として清掃用具の点検や安全点検など行わせる。 ・行事毎必要に応じて大掃除や安全点検を行う		
		体育部員や運動部員も計画・運営に参加させ、一体感や愛校心を育成する。	4					
		食習慣の把握に努め、正しい食習慣の理解と形成することを意識させる。	3					
	美化委員会活動の活性化など、学校全体で校舎内外の環境美化に努める。購買利用の利便性の向上と利用上のマナーの指導を行う。	校内のみならず通学路など環境を整えることなど自主的な清掃美化活動に推進できる態度を育成する。	3	3	生徒会を中心にクラブ員が協力して通学路の清掃奉仕活動を十分な成果を上げることができた。また清掃用具の使用法や部品交換など美化委員会の生徒と協力し合いながら進めることができた。 今年度は30周年記念行事に合わせて大掃除を行った。 購買との連絡を密に取り、日程の調整や利用の仕方、マナーなどの指導はできた。			
		校内において分別収集などを行い、生涯にわたり循環型社会を担うことの重要性を理解させる。	3					
購買の利用を円滑に進めるために各方面との連絡を密に取り、また利用のマナー向上のための啓発に努める。		3						

総務 企画部	保護者・各種団体等との連携を深める。	本校に係わる育友会・各種団体等との多方面に渡る円滑で緊密な連携・協力を行い、本校教育への関心を高め、生徒を取り巻く教育組織環境を固める。育友会総会への多くの保護者の参加と組織の活性化を図る。	4	育友会や各種団体との円滑な連携により順調に事業が進んだ。三者懇談時のバザー品の提供数が例年より少なかったが学級委員・本部役員等の尽力の結果、購入者数・売り上げも例年並みとなった。関学・甲南大への育友会大学訪問は36名が参加。充実した内容で実施でき、保護者の進路への関心の高さが窺えた。	改善方法①：育友会総会での魅力ある講演・同窓会総会での魅力あるプログラム構成に向け、他分掌や関係機関と連携をとり内容改善に取り組む。
	卒業生との連携を強化する。	堅固な同窓会組織の確立を目指し、定期的な監事会の開催や監事間の連携など、活動の活性化を図る。同窓会総会には100名以上の参加を目指す。	3	昨年同窓会総会への出欠往復葉書を卒業前に作成させ郵送する取組をしているが、返信数が145名と少なく、総会出席者も65名と少なかった。大学1年の5月は参加に不都合な卒業生が多いようである。以前の卒業生も含め、議事以外のプログラムに工夫をして参加しやすい体制づくりが必要である。	改善方法②：30周年に関わっての盛り上がりや活性化した組織運営を活かし、次の10年に向けて“チーム登美高”として、全校体制をより強固なものにしながら、育友会・同窓会・後援会・登美会等との連携や協力体制を深めていく。
	式典等の企画・運営と各部との連携を図る。	全校体制による、厳粛で、温かみがあり、生徒・保護者・教職員いずれの心にも残る入学式・卒業式の運営を行う。始業式・終業式・修了式は規律ある式を行う。	4	職員や生徒の協力の下、30周年式典をはじめ入学式・離任式等は生徒による司会・運営が大変好評で、厳粛な中にも温かみのある式典が実施できた。また事前指導の大変さや、オリター指導など他分掌との連携や今後の体制化等が課題である。	改善方法③：アンケートや調査・行事の成果と課題等の考察を次のステップとして活かし、HPなどの広報活動についてもさらに活発化する。
	学校評価計画表の作成、総括会議を主催し、充実したものとす。	各分掌、教科、学年の基幹目標をまとめ、学校の教育方針を提示する。総括会議を主催し、様々な角度から教育活動を検証し、次年度への課題を明らかにする。	3	各分掌・学年・教科から出された基幹目標をもとに本校の教育方針・計画をまとめ学校計画表を作成、「学校経営計画」に掲載した。意見の集約方法や総括会議の持ち方に改善を加え、進化し続ける学校づくりにつながる取組を行った。	改善方法④：語学研修の現地での生徒掌握、トラブル解決に引率者の負担が大きい。できるだけ20名定員の原則で実施したい。
	生徒、保護者からの意見を集約し、学校運営に活かす。	各種のアンケート、調査を行い、保護者、生徒、外部関係者等の学校への評価を明らかにし、その反省のもと、教育活動に活かせるようにする。	3	1・2学期末実施の保護者アンケートの考察から、保護者が学校からの情報を得る割合や親子で会話する時間の増加が見られ、保護者の本校への関心度も上昇を見た。今後さらに分掌間の連携や協力が必要で、保護者に見える返答や学校としての取組を公表・発信するシステムを構築する必要がある。	改善方法⑤：オープンスクールの成果を大切にしながら、コンセプト・内容・持ち方等を深化させ、より魅力的で、本校にとっても中学生にとっても有意義なものに再構築する。
	語学研修の企画、運営準備をする。	オーストラリア語学研修の実施にむけて研修内容を企画・推進し、業者や訪問校との打ち合わせ、保護者への説明会の開催などの中心的役割を担う。	4	過去の参加者アンケート等に基づき、より良い事前・語学研修に向け業者との交渉や保護者説明会等に取組んだ。オープンスクールや国際理解（総合）の授業等、研修後の活動にも力を入れた。ホストファミリー等現地での不安材料が一部見られる。これを期待して入学する生徒もおり、より良い形で継続したい。	
	本校の活動を広げ、教育活動の周知に努める。	学校案内誌『碧き風』の制作、オープンスクールの実施、学校ホームページの活用等を通じて本校の良さを内外に伝える広報活動を推進する。活動の中で生徒が様々な役割を担い、愛校心が育つように取り組む。	4	2度のオープンスクールは1000名を超える参加者を迎え生徒による運営で実施でき、大変評判も良かった。生徒主体の実施は夏休み前・夏休み中の準備指導に苦労がある。『碧き風』は生徒の活き活きとした姿が伝わり、わかりやすく見応えがあると好評である。HPもタイムリーに情報を伝えられた。	
文化 図書部	図書館の有効利用を促進し、生徒の知識欲の高揚に努め、読書週間を身に付けさせることにより、自ら思考し判断する力や表現力を養う。	各教科・各分掌との連携を図り、必要な資料や情報を提供し、教育課程の展開に寄与する。	4	1. 資料提供について 成 果： 昨年度の反省を踏まえ、年度当初に学校行事年間計画やシラバスを参考に年間計画を立て、展示や資料提供を実施した。 課 題： ①計画通り実施できなかった展示がいくつかあった。 ②図書館内で完結しており、教科と連携しているとは言えない。 2. 読書の推進について 成 果： 教職員の推薦本・生徒のリクエスト本などの購入、生徒との地道な関係作りを通して、読書の推進につとめた。 課 題： 今年度は貸出冊数がふるわなかった。年間（1月末現在）貸出冊数は、1年は634冊、2年は210冊、3年は683冊、教職員272冊、合計1799冊で、目標を大きく下回った。来年度に向けて原因及び対策を考えている。 3. 図書委員会について 成 果： 日常の図書館活動の他、「読書週間」「ベルマーク集め大会」「文化祭参加」「古本交換市」などを実施した。今年度は約25,000円分のベルマークが集まり、ベルマーク預金で図書委員会選定の図書を約20,000円分購入した。また、委員会活動の一環として文化祭で絵本読み語り「どこいったん」を上演した。 課 題： 図書委員に自主的に活動してもらいたい。	1. 資料提供について 成 果： 昨年度の反省を踏まえ、年度当初に学校行事年間計画やシラバスを参考に年間計画を立て、展示や資料提供を実施した。 課 題： ①計画通り実施できなかった展示がいくつかあった。②図書館内で完結しており、教科と連携しているとは言えない。 2. 読書の推進について 成 果： 教職員の推薦本・生徒のリクエスト本などの購入、生徒との地道な関係作りを通して、読書の推進につとめた。 課 題： 今年度は貸出冊数がふるわなかった。年間（1月末現在）貸出冊数は、1年は634冊、2年は210冊、3年は683冊、教職員272冊、合計1799冊で、目標を大きく下回った。来年度に向けて原因及び対策を考えている。 3. 図書委員会について 成 果： 日常の図書館活動の他、「読書週間」「ベルマーク集め大会」「文化祭参加」「古本交換市」などを実施した。今年度は約25,000円分のベルマークが集まり、ベルマーク預金で図書委員会選定の図書を約20,000円分購入した。また、委員会活動の一環として文化祭で絵本読み語り「どこいったん」を上演した。
		読書の推進に努め、年間貸出冊数1人3冊、各学年800冊以上を目標とする。	2		
		図書委員会の広報活動を活かし、ベルマークの収集に取り組む、図書の実績をはかる。	4		
	文化・芸術、伝統への理解と認識を深め、豊かな情操を育む。	文化祭における質の高い発表をめざし、文化委員の指導と支援に努める。	4	4. 文化委員の指導と支援について 成 果： 文化委員会は、各クラスのポスター・プログラム・看板制作の広報活動を担い、文化祭を盛り上げる取り組みをすともにも、生徒会指導部との連携の元にクラスの催しに尽力した。またクラスへの支援として、文化祭関連の参考図書コーナーを設置した。 課 題： 生徒の文化祭における質の高い発表の支援として、今後どのような方策を考えていくかが検討課題である。 5. 文化鑑賞会について （今年度は30周年記念行事のコンサートであったため、文化図書部としての評価の対象外とする。） 課 題： 文化鑑賞会の開催時期・方法については引き続き検討する必要がある。 6. カルタ会について （今年度はインフルエンザの猛威により、感染拡大を避けるため中止となった。） 課 題： 来年度もインフルエンザの流行を見据えながら、よりよい実施方法を考えていきたい。 7. 文化講座について 成 果： 昨年度に引き続き本校の教諭を講師として、「高校生のためのゲーム理論」という題目で講義していただいたところ、好評であった。 課 題： もっと多くの生徒にしてもらいたい。	4. 改善案：①生徒会指導部と連携をはかる。 5. 改善案：①アンケートにもとづき、実施の時期と方法を検討する。②他の分掌と連携して、行事の精選、統合を図る。 6. 改善案：年間HR計画にもとづいて効果的な運営法を考える。 7. 改善案：①広報に努めて多くの生徒の参加を促す。②多くの先生にご協力いただき、様々な分野の講義をしていただけるように努力する。
		30周年記念行事（音楽鑑賞）の実行を支援し、文化に対する意識を高める。	4		
		百人一首カルタ大会の成功に向けて文化委員会活動を活かし、日本の古典文化への理解と関心を高める。	4		
	情報・視聴覚機器の有効利用を促進し、学習意欲の高揚に努める。	図書室内の情報機器活用を促進し、情報収集の支援をする。	4	8. 図書室内のパソコン活用について 成 果： X P のサポート終了にともない、タブレット端末で対応している。 課 題： 館内貸出の形で対応しているが、台数も限られており、生徒のニーズに十分に対応しているとは言えない。 9. 視聴覚機器の活用について 成 果： 行事の際にビデオカメラを貸し出している。 課 題： 一昨年度半ばより視聴覚教室の天井プロジェクタが故障したため、とりはずされており、現在は卓上式プロジェクタをその都度設置して使っている。ライターに不具合が生じているため、活用できない。 10. 情報機器の管理と利用促進について 成 果： 昨年度に引き続き体育の実技にタブレットを活用していただいている。 課 題： 一部の教科にとどまっている。データを吸い出すためのパソコンが必要。やはりノートパソコンが複数台無いと生徒の調べ学習に対応できない。	8. 改善案：①以前のようにノートパソコンを複数台設置してほしい。 9. 改善案：①早急に修理、あるいは機器の入れ替えを検討してほしい。 10. 改善案：①利用方法を提案する。②校内無線LANの整備を希望する。③生徒の調べ学習やレポート作成に対応したPCを図書室に置いてほしい。
視聴覚室内及び図書管理室内の視聴覚機器の活用を促進し、効果的な授業展開に寄与する。		2			
電子情報機器を適切に管理する。		3			

国語科	日々の授業を通して基礎・基本の徹底をはかる。	音読指導を緻密に行い、言葉に対する感性を高める。	4	4	各時間内に、できる限り音読の時間を取るようにしたが、生徒の主体的な取り組みには発展できなかった。 古典文法上の意味を理解した上で、意味把握に取り組むように進めたが、助動詞などの意味を理解するまで指導を徹底することが出来なかった。漢文に費やす時間数不足も次年度への課題としたい。 授業で取り上げた作品や作家の関連図書の展示や紹介を図書室で頂き、生徒の興味・関心を増やすことができた。 前年度に比較して、シラバスを参照する機会は増えているが、十分に活用するところには至っていない。生徒がシラバスを意識し、活用できるように、更なる充実を図りたい。教材を通して生徒が何かを感じ、考えようという気になる授業への工夫や研修が、今後更に必要である。 初読感を書かせ、プリントにして皆で読むことで、読みの視点の違いを感じさせ、授業への動機付けが出来た。また、自分以外の多様な感想や考え方をすることで、自己表現への抵抗感を少しは軽減できると感じさせることが出来た。自己表現の機会を持つための工夫が課題である。	・8名の教員がそれぞれの課題を自覚しつつも、教科全体としてチームワークを保ち、全員で前進していく姿勢を大切にしたい。 ・毎時間の授業で掘んだ改善策を、出来るだけ早期に共有する体制づくりが求められる。どの学年も現代文・古典は複数の教員で担当している。互いの指導観や作品を扱う観点も共有し、研鑽し合って、生徒に向き合っていく姿勢についても今後更に充実させていきたい。できるならば週間の時間の中に教科会議の時間を1時間設定していただきたい。 ・実力養成講座については、当初は盛況であるが、最後まで続かない生徒もいる。当初の生徒のモチベーションを持続させる工夫が必要である。漢文の実力養成講座の効果的な実施時期を工夫したい。 ・今年度の「アクティブ・ラーニング」に関する研修の成果を、来年度は実践に活かせるようにしていきたい。
		音読練習を積極的に行わせる。	3	3		
		古典文法を理解させることに努め、その力の定着をはかる。	3	3		
	授業の範囲に留まらず、日常生活の中で語彙や活字に対する興味を喚起させる。	新聞教材など話題性のある教材や作品の中で言語指導を行う。	3	3		
		図書室と連携し、教科書教材や作品の中で言語指導を行う。	4			
		授業で扱った作品の感想を、教師も含め互いに出し合い、感想や視点の多様性を理解させる。	3			
国語の様々な分野で自己表現の実践の場を多く持ち、生徒に自信をつけさせる。	学年や学習の深化に応じた自己表現の時間を計画的に継続して設定する。	3	3			
	様々な場、形式で「書く・発表する」ことで、自己表現に対する抵抗感を取り除く。また、表現の楽しさを味わい、さらには周囲との人間関係につなげていく。	3				
	教材を通して内なる自分を見つめ、自己表現につなげていけるよう、指導者が良い作品を選び、生徒の感想などを積極的に紹介していく。	3				
地歴・公民科	地理・歴史・公民に対する興味関心を高め、幅広い知識を獲得させ、深い理解を促すことで、地理的・歴史的・公民的思考力を身につけさせる。	生徒が興味関心を持ち、自ら考え、自ら学ぶ姿勢を引き出すような教材・授業方法・考查問題を工夫・開発する。	4	3	各科目とも、授業内容をまとめたテーマ学習を取り入れたプリント教材を作成し、理解を深める工夫を続けた。さらに、アクティブラーニングの手法を取り入れたワークショップ型授業の実践や視聴覚教材を活用した授業を適宜行うことで、生徒の興味関心や学習意欲を高めた。科目内では日常的に授業の進め方や指導内容について確認・調整しあい、情報交換によりその成果を共有した。各単元ごとにテーマを与えて論述問題を生徒にやらせて、交換させて相互評価と自己評価、教員評価の三観点からの評価を試みた。 授業内容については、現状では個々の教員の裁量に任されている部分が多いが、今以上に教科内で指導内容や使用教材を検討・共有しあったり、校外での合同研修を計画したりしながら、指導力の向上に努めたい。 アクティブラーニングの回数を増やして計画的な実施に結びつけ、生徒が主体的に参加する授業方法を工夫・開発する。また、入試対策として、低学年から地歴公民科目を受験科目として意識させること、生徒の需要に応じて実力養成講座の種類を増やすこと等を検討していく。 生徒による相互評価を導入することにより、他者への正しい評価ができる能力の育成に努める。	
		教員間において指導方法や教材開発等の交流を積極的に行い、指導力の向上を図る。	3			
		地理・歴史・公民の相互の関わりを意識させることで、科目横断的な知識・理解へと繋げる。	3			
	現代社会の問題点について、その原因・現状・対策を理解・分析・思考する力を養う。	新聞やニュース報道への興味関心を促し、時事的な問題に接する機会を増やす。併せて語彙読解力を育成する。	3	3		
		自分と世界との関わりを意識させ、異なる価値観や多様性への寛容と配慮の姿勢を養う。	3			
		基礎的・基本的事項の習得・定着を図るとともに、成績不振になる生徒が出ないよう、日常的なケアを心がける。	4			
進路実現のため、授業とともに実力養成講座の充実を図る。	実力養成講座への参加を促すとともに、入試対策の内容の充実を図る。	3	4			
数学科	基本的な知識の習得と技能の習熟を図り、それらを的確に活用する能力を伸ばす。	年度末において、追認考査対象生徒をなくす。	3	4	模試対策に向けての授業・補習を行ったことや、普段から模試を意識させる指導を行ったことによる効果が出た。基礎講座対象者は出ているが、追考査については不合格者は減っている。苦手な生徒に対しての個別指導は行っているが、得意な生徒が進んで学習していける雰囲気作りはもっとしていきたい。 成績の良い生徒の理系選択率や、数学を受験で使おうという生徒の割合は依然低く、数学科としてもっと数学の魅力などを伝える授業を行う必要があるように思えた。 これからのアクティブラーニングや観点別評価においては、生徒が主体的に学べるように、さらに教材の工夫や量などを研究していく必要がある。 実力養成講座に参加した生徒は苦手克服のため、実力をつけたい生徒の両方がいて、各生徒のニーズに対応できるよう、状況に応じて、教材の選択の面などで柔軟に対応していく必要があるように思えた。	
		模擬テストや県一斉学力テストで各自の得点アップをはかる。	4			
		苦手な生徒には、個別指導を行い、得意な生徒には問題集を自主的に解かせて、指導する。	4			
	家庭学習の習慣を身につけさせる。	必ず宿題を出させる。小単元ごとに小テストを実施する。	3			3
		定期的に授業ノートや問題集ノートを出させる。	4			
		実力養成講座の参加者を増やし、継続させる。	3			
日々の授業を通して、数学的な見方や考え方を認識し、数学の美しさ・おもしろさを感じられる生徒を育てる。	授業に集中させ、興味・関心をもたせる教材を工夫する。	4	4			
	身の回りの現象を数学的にとらえた教材を授業に取り入れる。	3				
理科	教材研究の時間を確保し、授業内容をより深化させるとともに、自然科学に対する基本的な知識と理解の定着をはかる。	実力養成講座の教材を精査し、より充実した内容になるよう努める。	4	4	実力養成講座は、主に受験で必要な科目の、文系生徒用の基礎講座と理系生徒用の専門講座の2講座を用意し、できるだけ生徒のニーズに沿うようにした。また、希望があれば実力養成講座終了後も個別に講座を開いている。 限られた授業時間数の中で教科書の内容を進むのに追われているが、探究活動など最低限の生徒実験は実施できたと思う。 進路目標を明確にしている生徒に対して個別にその対策問題を行うなど、早期に取り組みを行った。また、常に入試・模擬試験を意識し、家庭で取り組むべき課題を示し続けた。	
		自然科学に関する直近の話題の収集などを通じて、授業をより充実させる。	4			
	各単元に対応した実験を行うことで、自然科学に対する興味・関心を高めさせる。	演示実験および生徒実験の時間を確保する。	4			3
		実験器具の整備と薬品の点検・管理を確実にを行う。	4			
		新課程に対応した、生徒実験の研究・開発に努める。	4			
	理系学部進路希望者の進路実現をめざす。	個々の生徒の進路希望に即した助言ができるよう、進路関係の情報収集に努める。	4			3
大学入試センター試験と国公立2次試験、主要大学の問題を研究し、入試に対応できる実力の向上をはかる。		3				



保健 体育科	運動に主体的に取り組む体験を通して、生涯にわたって運動を継続する力を身に付けさせる。	2・3年生についてグループノートの内容の充実を図る。	4	4	グループ学習を多用し、グループ毎のノート活用や学習カードの活用によって、生徒の課題や問題点などを見つけて出す手立となった。また、生徒においても、仲間と共に技術の向上や課題解決の方法を話し合いの中から見つける機会を持つことができた。	・教師主導型の授業から、アクティブラーニングを中心とした授業形態を多く用いる。評価基準や評価方法を生徒にも示すことによって、教えたことをどのように評価しているのかを、明確にできるようにする。特に、思考・判断や知識・理解の評価においては、学習カードやグループノートを活用し、生徒の実態把握と生徒の課題解決の手立てとするなど、丁寧に積極的に関わる。  ・体育理論の授業内容を充実させ、生徒間の意見交換などを行い、スポーツに関する関わり方を考えさせる。  ・体育実技の授業と保健授業との関連を密にし、健康の保持増進と基礎的体力の向上の推進を図るために、発達段階に応じた健康課題を理解させ、自ら健康管理が実践できるように育成する。
		1・2年生の授業でグループ学習を多用する。	4			
	運動の合理的な実践を通して、健康の保持増進と基礎的体力の向上を図る。	年間を通してラジオ体操と補強運動を継続して行う。	4			
		体調に応じて運動量を調整したり、仲間や相手の技能・体力の程度に応じて配慮できる能力を育てる。	3			
		体育理論では、スポーツの意義や歴史、文化的特徴の理解およびスポーツに対する意識の向上を図る。	4			
	健康と安全について総合的に理解を含め、これらの今日的課題に対し、主体的に取り組む、改善・維持・管理していく力を身に付けさせる。	生き生きとした社会生活を送るために必要な健康に関する知識を習得する。	4	4	生涯の各段階における、健康課題に応じて、自らがこれに適切に対応するために、健康に関する知識を理解し、自己の健康管理及び生活習慣の確立に向けて実践させた。また、応急手当や熱中症対策、心肺蘇生法(実習含む)について学習し、適切な応急手当や処置によって、傷害や疾病の軽減や人命救助につなげる意識を身につけた。	
	生涯にわたって健康に生活するために、生活習慣の指標を身につけさせる。	4				
	応急手当やAEDの使用方法を含めた心肺蘇生法の手順を身に付けさせる。	4				
音楽科	様々な音楽における興味・関心・意欲を養わせる。	古今東西の幅広い音楽にふれる中で、自ら様々な音楽活動に取り組む姿勢を身に付け、生涯にわたり音楽を愛好する心を育成する。	4	4	全体を通して、多くの生徒達が様々な音楽活動に意欲的に取り組んでいたが、モチベーションの更なる向上を目指し、工夫を重ねていきたい。  音楽科における基礎基本となる諸能力を身に付ける時間を確保しながら、個々の表現や創造力を更に高められるように、授業展開していきたい。  個人差の大きい領域であるが、生徒各々が能力を向上させているように、様々なレベルに対応しながら進めていきたい。	生徒一人ひとりが意欲的に各々の音楽能力を向上させていけるように、さらに授業展開に工夫を加えていきたい。
	音楽における豊かな表現力や独自の創造力を高めさせる。	読譜力を高めるとともに、幅広い歌唱・器楽演奏活動を通して、表現力をさらに高め、また、自ら音楽を創造する能力を育成する。	4			
	幅広い音楽における鑑賞能力を高めさせる。	様々な音や音楽、音楽形態を知ると共に、それらを知覚、認識し、さらに分析できる様に、音楽において、より一層深い鑑賞能力を育成する。	3			
美術科	見る・描く・作るの基礎を身につけて表現する喜びを体験させる。	生活に生きるデッサンの基礎能力を身につけさせる。	3	4	手、人物、静物等の題材をデッサンすることにおいて、各自の表現ができた。  鉛筆、ペン、水彩、アクリルガッシュ、版画、絵本制作等、様々な画材、用具を使い、その特徴を生かした表現ができた。  4つの自画像では自己の内面を抽象画に、またカレンダー作成や色彩構成においても、それぞれの個性を活かして表現できた。  1学期当初は自分の作品を人前で見せる恥ずらみもあり、小声で言葉も少なかったが、回数を重ねるうちに各自が客観的に自分を評価出来るようになった。  日本や西洋の美術史を学び、その中でダ・ヴィンチ、ゴッホ、ピカソ等11名の画家の生涯と作品を紹介したところ、興味を持ち熱心に取り組もうとする意欲が感じられた。	1年間で、できるだけ多くの表現方法を体験させようとしたので、実技時間が足りなく完成度にやや差が出たため、1つ1つにじっくり取り組む時間的余裕を持たせたい。  芸術は才能に恵まれた者だけのものではなく、自分の思いを表現することであるということを体験し、楽しく制作している様子も見られるので、さらに、描きたい、つくりたい(自発性)、それぞれの表現の追求(自主性)、完成の喜びと次への意欲(主体性)を伸ばしていきたい。
	美術を愛好する心情を育て感性を高めさせる。	それぞれの個性を認識させ、それを活かす方法を考えさせる。	3			
		講習会を開き、感想を述べさせる。	3			
	様々な美術作品に関する知識を身につけさせる。	美術史上の画家や、その生涯と作品について知り、名画の鑑賞能力を身につけさせる。	4			
書道科	書の歴史を学び、名品名跡の鑑賞力を身につけさせる。	できるだけ多くの名品名跡にふれさせる。古典書道にじっくり取り組ませる。	3	3	漢字の書、仮名の書、共に古典の臨書、鑑賞を中心に学習を進めた。漢字仮名交じりの書では、古典からの展開に加え、現代的な作品づくりにも取り組んだ。  漢字の書、仮名の書は各古典による特徴の違いを自分なりに意識し、表現しようとしていた。また漢字仮名交じりの書では、自らが表現したい作品に合わせた書きぶりの違いを出そうとしていた。  ペン字やのし袋の書き方を学んだ。また、身のまわりの様々な書作品を紹介することで、書が身近にあることを認識できた。	古典作品には多くふれることができたが、今後はさらに生徒自身がどう感じるかなどの鑑賞能力を向上させていきたい。  個人の能力の差が大きいので、それに適した対応を心がけつつ、それぞれの表現の良いところを引き出せるような指導の工夫をしていきたい。  数回の授業で上達するものではないので、継続的な指導と工夫が必要であると痛感した。
	書美を表現する力を身につけさせる。	古典臨書を通じて様々な表現技術を身につけさせる。作品制作に意欲的に取り組ませる。	4			
	日常における書写能力を身につけさせる。	実用的な書に取り組ませる。生活の中の様々な書に目を向けさせる。	3			
英語科	4領域(リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング)をバランスよく学べるように、生徒が英語の学習に興味・関心を持つよう指導の工夫をする。	定期検査や模試等の各種テストや授業を通して4領域の生徒の学習度合いを測る。特に今年度はCTの時間等も利用し、WRITING(表現)力を強化することを目標としたい。	3	3	4技能(リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング)をバランスよく伸ばす授業づくりに取り組むことができたが、入試を控えた3年生の授業では、リーディングに重きを置く傾向にあった。ライティングに関しては、生徒が書いたものを添削して評価するだけでなく、スピーチの形で発表して評価するといったパフォーマンステストの形を取り入れることで、生徒のモチベーションや英語に対する興味・関心を高めたい。  GTEC受験に向け、CTを活用し、リーディングおよびリスニングに取り組むことができた。また、授業において、ライティングに取り組むことができた。  語彙指導に関しては、学年の実態に応じた計画を立て、語彙の習得を促すことができた。  英語表現Ⅰおよび英語表現Ⅱの授業において、少人数編成で授業を行い、英語が苦手な生徒に目を配り、きめ細かい指導を行うことができた。  家庭学習の習慣化には引き続き取り組みたい。授業観察週間を利用して、お互いの授業を見学し、授業の向上に役立てることができた教員もいた。	4技能をバランスよく伸ばす学習到達目標を設定し、3年間を通して取り組み、技能間の隔りを解消する。評価の方法として、パフォーマンステストを取り入れ、スピーキングとライティングの力を伸ばす。  家庭学習の習慣化に関しては、他の教科とのバランスも考えながら、生徒が自主的に取り組める工夫を行い、実践する。
		生徒達に資格を持つことの意義についての啓発や指導に努め、英語検定やGTEC等に積極的に取り組ませるようになる。また、その他の検定等を紹介することで生徒に関心を持たせる。	3			
	リーディング力の向上に必要な語彙力や文法力をしっかりと定着させ、速読のスピードアップや長文読解力の向上を目標とする。	授業を中心に、長期休業中の課題・補助教材等を有効に利用し、繰り返し学習も含めて1年間に第1学年は2000語、第2学年は3500語、第3学年では5000語の習得を目指す。  少人数編成による授業の実施や実力養成講座の開講等、生徒のニーズに応じたきめ細かい指導を目指す。	3			
		課題(宿題)を課したり小テストなどを定期的に行うことにより、習熟度、語彙力をチェックし、家庭学習の習慣化を図る。教員間での情報交換を頻繁に行い、教員の指導力の向上に努める。	3			
家庭科	人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費社会などに関する基本的な知識と技術を習得させ、生活課題を主体的に解決するとともに生活の充実向上を図る能力と実践的態度を育てる。	自立度チェックシートを活用し、自己分析を行い、生活向上のために必要な知識と技術を理解し、演習・実習を通して実践的な力を養う。  グループ学習を取り入れコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を養う。	3	3	自立度チェックシートを活用し、具体的な生活課題を見いだす工夫を行った。実習や演習など体験的な学習を中心とし、生活課題を解決するための知識と技術を身につけさせた。  調理実習や作品製作でグループ学習を取り入れ、学習のテーマや役割分担などを生徒同士で話し合う中で学習を進めていった。学習の成果や課題についてクラスや文化祭などで発表する機会を設けた。  ホームプロジェクトを夏期休業中と冬期休業中に実施した。生活課題の解決や自立度の向上になるように指導した。生徒の家庭の協力をいただいただけではなく、励ましのメッセージも添えていただいた。学校家庭クラブ活動では、奈良県高等学校家庭クラブ連盟の研修会、研究発表大会などに参加し、県単位の活動にも関心を持たせた。校内では保育所訪問、交通安全啓発活動、県立ろう学校との交流会など地域活動にも積極的に取り組むよう指導を行った。	実践力をつけるために、実習・実験を予定していたが、電気・水道・ガスといったライフラインの不備で予定通りの学習内容を実施できなかった。  実習室の管理を徹底させるとともに学校などの協力を得て授業が再開できるようにしていきたい。  各分野との関連性をもって授業展開できるように題材の工夫を進められるよう、さらに研修を深めたい。
	自己の家庭生活や地域の生活と関連づけて生活上の課題を設定し解決方法を考え計画を立て実践することを通して生活を科学的に探求する方法や問題解決の能力を身につけさせる。	ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動を充実させ、生活改善しながら、生活能力を高めていく。	3			
情報科	情報化社会で主体的に活躍するために、情報技術を科学的に考える力を身に付け、インターネットの持つ特性を学習する。	理数系の分野と情報セキュリティ技術の関連性を学び、科学技術の発達に伴い、情報技術も発達することを理解させる。  新聞記事で取り上げられる情報に関する事例を示す。情報に関する法律を学び、公民分野との関連性があることを学習する。	3	4	インターネットや情報社会の光の部分と陰の部分について、調べ学習・発表学習を行い、生活を豊かにする一方で、ネットに潜む危険性を学習した。さらに、情報モラルやマナーを守る事の大切さを実践する態度を育成した。  プレゼンテーション用のソフトウェア「Just Slide」を使った発表学習に力を入れ、実習を行った。自分の意見をスライドにまとめる表現力などのコミュニケーション力の育成を行った。また、情報活用能力の育成のため、表計算ソフト「Just Calc」でのグラフ作成、表作成における関数を使う実習を行い、表計算ソフトの基礎を学習した。  教科書に沿った内容やコンピュータの実習から情報リテラシーの基礎を身に付ける。	・情報セキュリティや情報モラルについての知識は、1年での情報科だけの学習では、まだまだ不十分であり、より深く理解する必要がある。  ・教科「情報」の学習が終了してからも、継続して学習を進めるように各教科とのつながり意識した教科指導をしていきたい。
	情報機器を問題解決に効果的に使えるように、応用ソフトウェアの基本的な操作方法を身に付ける。	実習において、毎時間文章の入力をさせる。プレゼンテーションソフト、表計算ソフトを使用する実習を行う。	4			
	情報化社会でのルールやマナーを身に付け、情報を有効的に発信できる力を養う。	各メディアの持つ特徴から、情報の受信者として気をつけることを考えさせる。教室での教科書をベースとした授業と情報学習室での実習の授業を行う。	3			